

# 国立ペルゴラ劇場における施設管理に関する調査報告書 2018

## 1. 調査依頼者

Incorporated Non Profit Organization

Japan Amateur Musician Support Association (JAMSA)

President Tomomi DATE

NPO 法人日本アマチュア音楽家支援協会 代表理事 伊達知見

## 2. 調査の目的（調査依頼主旨）

イタリアには歴史的な建造物が多く残されています。しかもこれらの建造物が集まり街全体として調和のとれた美しい都市景観を形成して、訪れる多くの人々を魅了しています。またこうした歴史の中で芸術や文化が育まれ、音楽芸術においても世界最高水準のパフォーマンスで人々を魅了し続けています。イタリアの音楽芸術の舞台である、劇場にも長い歴史の中で培われてきた様々な取組みがあるものと推察いたします。

一方、日本ではこの50年程の間に、全国各地に大小のコンサートホールや劇場が相次いで建設されました。しかも質の高い施設や設備を備えた、優れたホールが多く出現しております。こうしたホールには、毎年世界中から名立たるアーティストが来日して、その素晴らしい公演で好評を博しております。ところがホールや劇場としての歴史が浅いところでは、事業運営の理念や施設管理のノウハウなどの蓄積が乏しく、その上最近では施設、設備の老朽化や技術革新に伴う適切な更新やメンテナンスが十分に行われず、劇場運営はもとより経営への影響も懸念されています。この問題は日本における劇場の取組むべき喫緊の課題といえます。

こうした背景から我々はこの間に、フィレンツェのベルディ劇場（TEATRO VERDI）、市立歌劇場（TEATRO DEL MAGGIO MUSICALE FIORENTINO）、さらにはフィレンツェ市文化部への取材を度々試みた中から、関係者の皆様から多くの知見をご教示頂きました。

今回の調査目的は、貴劇場における運営・管理に関する様々な取組をお聞きして、これまでの取材を踏まえて、フィレンツェにおける代表的な劇場の運営管理について総括しながら、日本の施設の運営管理の課題解決に向けた取組に役立てていくことを目的としています。

## 3. 調査日

2018年11月28日（水）

15:30～16:45

## 4. 取材先、対応者

Teatro della Toscana（国立ペルゴラ劇場：イタリア・フィレンツェ）

Luigi Perla 氏ほか2名

Tel：+39 055 2264307

l.perla@teatrodellatoscana.it

www.teatrodellatoscana.it

## 5. コーディネーター及び通訳

岡田美苗氏（フィレンツェ在住）

## 6. 調査項目

### 1) 施設管理に関する考え方

劇場は建築、電気及び機械などの設備から構成されるので、重要度の高い設備を重点的に管理（分解整備、部品交換、補修など）するなどが考えられますが、つぎの点でどのように取組んでいますか？

- 設立当初は芸術家の住居区画もあった。メンテは基金を設立して対応していた。特別のメンテは市が対応している。市からの支援がある。

※基金は「トスカーナ劇場財団(Fondazione Teatro della Toscana)」のこと。

- 2010年に資金的に危機に直面し、市がチームをつくって2011年から市が予算化して支援している。

#### (1) 施設の健全度、予防保全について

常時監視、定期点検及び劣化状態の観察など、市の基準に則って対応している。

#### (2) 計画的な修繕について

監視、点検結果を整理し、健全度を把握した修繕計画の有無については、2023年までの地震対策の長期計画をもっている。市の条例に基づいて電気、機械、空調など建築規準に則って対応する予定だ。

#### (2) 過去の整備修繕記録の有無について

設立当初からデザインや建築技術などの資料をアーカイブとして保存してある。

これらは保存や修復の際に使っている。

### 2) 施設管理体制

#### (1) 事業主体

設立当時からいろいろな運営主体が関わっていた。

#### (2) スタッフの人数

最盛期は約50人

ハイシーズンは9月から翌5月

#### (3) 管理体制

直営管理と委託管理の両方で対応している。

### 3) 施設の利用状況

シーズンである10月から4月までは基本的には週6回(月曜休館)の利用を考えている。

8月は休館だが、演劇学校、学会など利用もある。

### 4) ホール使用料金

約130万円(約10,000€)/日/休日、週末

※1ユーロ約130円として

使用内容、公演内容、清掃、設備使用状況により一概には言えない。

中には個人的に結婚式などの利用もある。

※富裕層の結婚式、誕生日会など

### 5) 市からの支援の有無

特別点検はフィレンツェ市に委託しているため、そういう意味でフィレンツェ市からの公的支援を受けている。

## 6) 施設概

### (1) 主な施設

客席数 大ホール 900 席、小ホール 150 席

(2) 建設年次 1656 年

## 7) 劇場の防災に関する考え方

### (1) 施設, 設備

法定点検は関係法に則って対応している。

500 席以上の劇場では公演中に消防当局が待機している。消防待機は有料だ。後に国から費用の補てんがある。

### (2) 火災及び地震発生時の対応 (公演中)、

市の基準に則って対応している。防災や避難については責任者を選任している。500 席を超える劇場は消防当局との連携が義務付けられている。

2010 年に公演中にボヤ騒ぎがあり、会場に警報が鳴り、900 人の観客を無事誘導したことがきっかけとなりスタッフの防災に対する認識も高まっている。

### (3) 研修、訓練の実施状況

廊下に物を置かないとか、24 時間体制のスタッフ(※守衛室のこと)も置いている。無線を使ったスタッフとの連絡体制も整えている。消防当局によるスタッフの訓練は有料です。研修にはコストがかかるので予算次第というところがある。やる気のあるスタッフかどうかは個人の意識に依存しているところもある。

### (4) 公演中の医師の待機

専用の部屋(救護室)があり医師が待機している。

救命救急 (AED) については関係スタッフ 4,5 人と医師が対応することになっている。

全員は対応しない。

## 8) 劇場の耐震対策 (耐震診断、耐震工事の予定、実施状況)

### (1) 現在の検討状況

地域的にフィレンツェは大規模な地震が発生するところではないと考えている。当初から建物自体が石や石灰が密につまった建物構造をしている。現在、専門家が法的基準に則ってコンピューターにより耐震チェックを実施している。その結果、1600 年代の建物の全体的な耐震工事は難しいと考えていて、長期的な視点から部分的に耐震化の取組の可能性を検討している。

### (2) 耐震化の実施状況

現在は外壁の補強工事を実施している。また屋根については地震よりもむしろ積雪の荷重に対する安全性を考慮した補強を考えており、25 メートルに及ぶ梁の構造計算を実施して、天井を支える部材の補強を考えている。その中ではできる限り従前の材料を使うようにしている。カーボンファイバー(炭素繊維)による補強など鋼材だけに頼らない補強も考えている。このように経済性を考慮して全体をブロックに分けて実施していくことを考えている。

9)テロ対策、警備体制、荷物チェックなどについて

演劇や文化施設なのでテロのターゲットとはかけ離れていると考えており、特段のテロ対策を持っているわけではない。防犯カメラの設置も含めて不審者対策として考えているくらいだ。ただし、ヘルメットや傘の会場内への持ち込みは禁止している。緊急避難時に邪魔なためクロークに預けてもらうことにしている。荷物チェックは実施していない。

10) 国立ペルゴラ劇場において撮影



ペルゴラ劇場の玄関



ホワイエ



大ホール内部



天井及び屋根の補強状況

## 11) 所見

これまで調査したフィレンツェの4つの劇場の中では、しっかりした計画を持ち、今後の対応を図ろうとする姿勢がうかがえる。中でも劇場の耐震化については専門家による委員を設置して長期計画に基づいて順次取組みをはじめている。この劇場の天井裏を見せてもらったときに感じたことだが、天井や屋根は鋼材によって補強されている(写真参照)。在来工法をどの程度評価しているのか、接合部の強度はどのように考えているかなど、もう少し専門家の話を聞いてみたかった。最近、日本の新たな耐震基準では木造による従来工法では耐震性が確保できないとされていて、木材構造だけではなく鋼材(治具)による補強とセットにならなければ地震に対する安全性は確保できないという考えに変わってきている。この点に関しては専門家による詳細な説明がなかったので今後の調査の課題としたい。

数年前の火災を経験してスタッフの危機管理に対する意識が高まったことはたいへん良い機会であった。日本では東日本大震災に教訓から、最近ではスタッフが現場において判断できるように訓練の質を高める取組みが見られる。例えば、スタッフが全員 AED を使えるように毎年訓練することや公演中に座席で倒れたお客様を救出する訓練を実施している事例を紹介すると、ペルゴラ劇場のスタッフは一同に驚いていた。防災や地震対策は専門のスタッフが対応するもので劇場のスタッフ全員が危機感を共有して対応を図ろうとするところまでは至っていないようだ。テロ対策についても、2015年11月パリ同時多発テロの標的になったバタ克蘭劇場の悲惨な事件以来、フィレンツェ市内の主要なところでは警察と軍による警備が続いている。街全体としての警戒レベルを高めているところは日本とは比較にならないと考えた方がよい。そのため劇場関係者のほとんどが芸術文化施設はテロのターゲットにはならないという認識が一般的だ。したがって、不審者には注意を払う程度で、荷物検査などは実施していない。また警察、消防及び行政当局との普段からの情報共有の重要性は認識しており、関連当局との日ごろからの関係づくりは極めて重要な予防対策となるだろう。

以上